

アトリエ 琉游舎 だより 64号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2019年10月23日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

水の道 風の道 人の道

- 普段見えていなかったことが、何か特別なことがあると突然見えてくることがあります。例えば豪雨の翌日にコリーナを散歩していると、あちらこちらに水の道が顕われてきます。
- 台風接近の予報に外に出て様子を確認しているのですが、今自分の立っているところでは暴風を感じません。ところが見上げると山の上の大木が暴れています。風の道が見えます。
- コリーナから勝善神社に通じる500メートルほどの細い山道はかつての会津古道だったそうです。この神社は馬の神を祀った神社で運送業を営む人が大勢お参りに来ていました。今や荒れ果てた山道もかつては人と馬の往来が盛んな会津往還の道だったのでしょうか。
- 水の道も風の道も人馬の道も自然の環境が水や風や人にいちばんふさわしい場所と形でできあがってきたものと思われます。言うなれば原始、道は自然の造形物だったのです。
- その道たちを人間は有り難く利用させて貰い、そして自分たちにより快適で便利のように道を付け替えてきました。治山治水治道。道を治めることはすなわち政治だったのです。
- 自然を恐れ感謝し共棲している間はそれぞれの道は人の役に立つように機能してきました。ところが一旦自然を怒らせると、道は暴れだし人に牙を剥きます。科学のない時代、それを天災地変と人々は呼びました。暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波、噴火。
- 自然災害の多い日本。水の道、風の道、人の道がおかしくなっていなければいいのですが。人の道を踏み外している人たちが、道を治めている人たちでないことを祈るばかりです。

木 金 土 日

10・11月のスケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			24 映画会 13:30	25 居酒屋の会 16時から	26	27
28	29	30	31 映画会 13:30	11月1日	2	3 写経会 13時半
4	5	6	7 映画会 13:30	8	9 詩話会 13時半から	10
11	12 読書会 13:30	13	14 映画会 13:30	15	16	17
18	19	20	21 映画会 13:30	22	23	24
25 居酒屋の会 16時から	26 読書会 13:30	27	28 映画会 13:30	29	30	12月1日 写経会 13時半

写経会
11月3日(日)
12月1日(日)
13時半から

読書会
11月12日(火)
11月26日(火)
13時半から

詩話会
11月9日(土)
13時半から

居酒屋の会
11月25日(月)
16時から

映画会
毎週木曜日
13時半から

狂言綺語…遊行期(生死不二)

インドのヒンドゥー社会にはアーシュラマ（住期）という理念的な人生区分の考え方があります。バラモン（司祭）クシャトリア（王族・武士）ヴァイシャ（農業・牧畜・商業従事者）の3階級の男子は四つの人生区分に随って一生を過ごすように決められていたのです。どこまで厳格に実行されていたかは定かではありませんが、インド人の中から生まれたこの考えから仏教の人生観の源泉が見えてくるような気がします。

アーシュラマは学生期、家住期、林住期、遊行期の四つです。「学生期」は師のもとでヴェーダを学ぶ時期。ヴェーダは宗教文書であり知識のことですので、まずは一人前になるための学びの時期。学生時代です。「家住期」は家庭にあって子をもうけ一家の祭式を主宰する時期。経済活動を行い家族を守り先祖を祀る一家の大黒柱であり、社会的責任を引き受ける時代です。「林住期」は森林に隠棲して修行する時期。経済活動からの引退。そして一族の財産と祭祀を子供に相続させ、社会的責任から解放されます。社会的存在から宗教的存在への移行です。「遊行期」は一定の住所をもたず乞食遊行する時期。森林での修業を経て真の宗教的自由を得、あるがままに道を遊行する時期です。宗教的生活の実践、信行一致の日々です。

時代も風土も違う今の日本にこの四住期を当てはめることは無理がありますが、漠然と私たちの人生区分に当てはまるようにも思えます。学生期と家住期はそのままなので分かり易いのですが、後の二つは一般的には退職後の人生で「余生」や「第二の人生」という言葉でまとめられてしまうものでしょう。私は「余り物の人生」と読めてしまう余生や「悠々自適」が理想のように誤解される第二の人生という言葉が今でも好きになれません。私が宗教生活に入った真の理由は林住期と遊行期に当てはまる人生期を余生や第二の人生として生き、そして死んでいくことに耐えられなかったからです。

私がインド人のこの人生観をどのように見たかをお話しします。四住期をそれぞれ年相応に随って果すべき役割のように見れば分かり易いかも知れませんが、私はその様に見るとどうしても後半の二つは社会的存在からの離脱、社会的なコストとならないための隠居、もっと過激な言葉で言えば姥捨て山の思想にも通じてしまうように感じてしまいます。つまり経済活動には役立たないから邪魔にならないように林の中に隠棲して、人から食を乞うて（乞食）細々と暮しなさいという考え方。生産性のない人たちの体の良い社会生活からの追放です。現実の日本の高齢者社会とその未来を考えると、林住期と遊行期にあたる年代を今の日本で年相応の役割を果すには、このように考えることは決して極端な見方ではないでしょう。しかし私は四住期を年相応の役割とは見ません。最初の三つは遊行期のための準備期間にすぎないと見ています。

「遊行」は、私の宗教生活が進むべき道そのもの、つまり「何ものにも囚われずあるがままの姿で行いの毎日を過ごすこと」なのです。遊行期を迎えて初めて「信行一致」が実現し安らぎの日々を思うがままに歩むことが出来る。これが私の「願い誓い行う」ことです。そのためには長い準備期間が必要だったのでしょう。私の学生期は23歳まで。世界は理性と感情で全て説明できると考える「信」のかけらもない時期でした。しかしそれは今考えれば種々の知識に触れる智の拡散の時、「信」への助走期間だったので。家住期は55歳まで、経済活動によって一家を構え社会に寄与し実践を積み上げる経験の拡散の時、「行い」の助走期間だったので。55歳で出家し精神的な林住期に入りました。まだ表面上は経済活動を続けていましたが、余生や第二の人生ではないこれからを送るための精神的隠棲と修業に励んだ時期です。そこで今までの知識と経験の拡散を「信」と「行」に収斂させることが出来るようになりました。そして59歳で遊行期に歩みを進めることができたのです。思えば準備期間に59年の歳月をかけてやっと遊行期を迎えることが出来ました。そこは日々刺激的で変化に富み豊かで喜びに溢れた処です。決して余生でも第二の人生でもない、三つの準備期間の試行錯誤が培った経験と知恵の堅固な土台の上に築かれた信行一致の「場」です。その場で私が観たものは「生死不二」です。教えのあるところは全て道場です。その道場は信行一致を実践することによって現前するのです。そしてそこが道場であり法要の場であり生死不二の場となります。その場を見つけるために私の59年にわたる学生期と家住期と林住期があったと言えます。ここまでが永かったか短かったかは分かりません。しかし今過ごす遊行期は永遠に続きます。なぜなら遊行期は生死不二の場だからです。

私は現在琉游舎とコリーナシップの二つの場を道場に信行一致を実践しています。前者は集いの場・祈りの場・学びの場・稽古の場・語りの場・瞑想の場・酒宴の場としてのプライベート公民館、現代の寺です。後者は老若男女互いに出来る人が出来ない人のために助け合う組織、お互い様・相互扶助の安心の船（シップ）です。二つの場とも世代間横断と持続可能性を2本の柱にして、ここコリーナ矢板の地が「高齢者にとっては終の棲家であるように、働く世代にとっては安らぎのわが家であるように、子供にとってはいつでも戻ることのできる故郷となるように」と願い誓い行う場となりました。場を作ることは一人でもできますが場は動かなければただの器です。ただの器を動かすものはその場にいるみんなの「願い」です。琉游舎とコリーナシップに、みんなの「こうしたい」「ああしたい」の願いが注がれると場は動きだし、生死不二を現前させます。私の遊行期は皆さんの願いのあるがままに動かされ、自由に何ものにも囚われずに遊ぶことの出来る安らぎの処。願いがある限り場は永遠に動き続けます。みなさんの

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

注がれますように。（出琉）